

5. 解説「関連データ・用語・仕組み」：キュレーションとは

「キュレーション」とは何か。「キュレーション」の語源は「キュレーター(curator)」と云われている。その「キュレーター」とは、「博物館(美術館含む)、図書館、公文書館のような資料蓄積型文化施設において、施設の収集する資料に関する鑑定や研究を行い、学術的専門知識をもって業務の管理監督を行う専門職、管理職を指す(※curate—展覧会を組織すること)。英語由来の外来語であり、日本語でもほぼ同じ意味で使われている。日本にキュレーターという語が入ってくる 2000 年代までは、学芸員という語が使われていた。現在は学芸員とキュレーターが混在している。」([ウィキペディア](#))

この本来的定義に基づくキュレーターによるキュレーションは、相応の専門的知識・見識等が不可欠であり、分野毎にキュレーターなり、キュレーションが特徴付けられる。上記のウィキペディアによると、例えば、「現代美術におけるキュレーターは、現代美術と社会の橋渡しをする存在」とされている。

近年、「キュレーションメディア」「キュレーションサイト」「まとめサイト」等の表現でよく使用されている IT 分野においては、「キュレーションとは、インターネット上の情報を、特定の視点で収集、選別、編集することで新しい価値を持たせ、それを公開することを指す。」([IT 用語辞典](#))とされるが、キュレーションを誰が行うかについては明確にされていない。

そもそも、わが国において、「キュレーション」と云う用語が普及し始めるきっかけの一つが、[「佐々木俊尚『キュレーションの時代 ―「つながり」の情報革命が始まる』筑摩書房〈ちくま新書〉 2011 年」](#)と思われる。この著者によれば「無数の情報の中から、自分の価値観や世界観に基づいて情報を拾い上げ、そこに新たな意味を与え、そして多くの人と共有すること」とある。「多くの人と共有すること」すなわち「つながり」ということである。本メルマガもこの概念に近い意識でキュレーションしている。

上記筆者は、「つながり」の素として、「ビオトープ」という概念を取り上げている。「ビオトープとは、元々は自然の状態で多様な動植物が生息する環境の最小単位のこと、地球上の生態系(エコシステム)を保持して行く上で欠くことの出来ない構成ユニット単位を意味するドイツ語の造語(BIO-TOPE)である。」この概念を著者は、「情報を求める人が存在している場所＝小さな情報圏域」として援用している。このビオトープをつなぐソーシャルメディアのおかげで一大情報流が生じ、消費の流れをつくり、時代の流れをつくると示唆している。まさに、現在起きていることを 10 年前に描き出している。そして、このビオトープへの案内役として、「視座(パースペクティブ)を提供するキュレーター」の存在が重要としている。

コロナ禍において、大規模イベントが自粛される中、地域に散在する小さなイベントをこのビオトープと見なせば、それらをつなぐキュレーションは新たな価値を生むことになる。キュレーションは社会的活動についても有効な概念である。